

「多重言語使用の現実とその分析」

ー台湾原住民とフィリピンの実例よりー

静岡大学 森口恒一

台湾・フィリピンの原住民の言語調査を行っている際に気が付くのは、日本では考えられない複雑な多重言語使用である。この現象は、原住民言語の研究に加えて、一つの大きな研究対象となる。

台湾、フィリピンの多重言語使用に関する論文を執筆中に一番苦勞することは、結論としての一般化が非常に難しいという事である。そこで、この発表ではフィリピンと台湾の現地調査の結果をもとに、改めて多重言語使用の特徴と論文の執筆の方向性を模索することにする。全体は、以下のように四章に分かれている。1. 多重言語使用に関する著名言語学者の見解、2. 単一言語使用の言語習得過程、3. 多重言語使用の言語習得過程、そして、4. 多重言語使用の資料の分析方法の試案と方向性 である。

第一章は、言語学史的な観点から多重言語使用の際の混成部分、混成語の存在を否定する Sapir, Meillet, Burling, Gumperz と混成部、混成語の存在を認める Bloomfield, Jespersen, Weinreich の見解を示した。現在では、多重言語使用の際には、多重に使用されている個々の言語規則の他に混成部をも含めた大きな枠組みが存在することを示されている。すなわち、コード・スイッチング（規則転換）と規則的混成部があるということである。一方、習得する人間は、単一言語使用であっても多重言語使用者であっても生物的には同じ人間であるので、単一言語使用者と多重言語使用者との違いは、出生以後の環境・教育等が異なっているために単一言語使用や多重言語使用が発生したと類推した。そこで、それぞれの年齢的な習得環境を考察する必要があることを示した。

第2章では、単一言語使用の年齢とその環境を考察した。その際に、フィリピン、台湾、そして、アメリカにおける特殊な単一言語使用者の例と Bernstein の単一言語使用者でありながら精密コードと制限コードの両方を使用する場合の多重言語性を示した。

第3章で、多重言語使用の例を外国語教育、Pidgin, Creole、社会的多重言語使用、家庭的多重言語使用の環境と年齢を精査した。その結果、上記のいくつかの多重言語使用は環境次第により移行する可能性が、また、単一言語使用者に変化する可能性があることが明白になった。その場合に重要なのは、家族による”矯正”と学校、教育機関での”教正”、そして、社会における”慣れ”の差であり、それらの組み合わせにより変化が起こることを示した。

第4章の結論で、多重言語使用の研究の際に追求できることは、一般化ではなく、将来的に一般化を目的にしながらも、多様で複雑な言語習得過程の資料個々を数多く、言語学の分野別に分析・解析をしていくだけであることを示した。また、将来的には、それらの結果に基づき、多重言語使用現象の種類の総体的な分類とそれらの統合が必要であることもわかった。